

## オーストラリア雑感 —自然との距離感—

神戸大学 経済経営研究所  
准教授 松尾 美和

私事だが、2月中にお休みを頂いてオーストラリアのメルボルンに家族旅行をしてきた。もうすぐ小学生になる娘が筋金入りの動物好き、特にペンギンオタクなので、なんとか野生のペンギンを見せようと企画した旅行だった。(お供をさせられた3歳の息子は飛行機・電車オタクなので、どこへ連れて行かれようと飛行機や電車に乗れるならばご機嫌である)

今回の旅行は私にとっても初めてのオーストラリアだったのだが、オーストラリアでは日本よりも人々のエコ意識が高いように感じた。(プラスチック製品の排除は浸透しており、ストローはほとんど紙製であったしエコバッグ持参は当然という風潮がある。動物園や水族館においても、動物と触れ合って楽しむということだけでなく、人間が動物たちに負の影響を与えない(もしくは最小限に減らす)ことを強いメッセージとして打ち出している。各所で流れる映像などを見ていると「ユニークな生態系を持つ美しい国土」が誇られ、「アウトドアを楽しむ、健康的で逞しい男女」がオーストラリア人像として描かれることが多い。自然を愛し自然に親しむということが「良きオーストラリア人の行い」として共有されているように見受けられた。(余談であるが、各国の代表的なエアラインの機内非常用設備案内の動画は、その国で「良きもの」とされているものが垣間見られて面白い。)

しかし、そのオーストラリアはアメリカに次ぐ自動車依存国である。メルボルンは、中心市街地こそ開発密度が高くトラムだけで各所に移動できるが、その郊外は遠くまで低密度開発が広がっている。森を分断するように農地が広がり、森に入り込むように住宅が建つ。都市部から自動車ですぐ1時間半ほどの場所にある州立野生動物保護区を訪れても、それを分断するように高級住宅が建っており、向かう道中では時々野生動物が自動車にはねられていた。「自然の近くで自然と親しんで暮らす」という個人の理想を実現しようとすれば、低密度郊外開発を招く。その結果、森は分断されて生態系は脅かされるし、人々は自動車ですぐ長距離移動をしてせつせと温暖化に加担しているのである。

ハーバード大学の Edward Glaeser は著書の中で「自然を愛するのであれば、(人間は)自然に近づかない方がいい」との持論を語っていた。都市居住は多様なアメニテ

イや利益を生み出す人類最高の発明であるだけでなく、安易に人間が自然に入ればそれを破壊してしまう。だから人間は都市に集住してそこにとどまるべきだ、と。ニューヨーク・シティ出身の彼らしい価値観が表れた言葉であり、反論も多くあるであろう。だが、このオーストラリアの現状を見ると、彼の言葉を否定しきれないのではなかろうか。

娘が「フクロオオカミさん、生きていればよかったのに。会いたかったな」とつぶやくのを聞きながら、「動物を愛する人間が動物園に閉じ込められた動物を見に行く」ということも甚だ自己矛盾を含んだ行為であることに思いを馳せる。メルボルンで訪れた動物園二つを含め近年の動物園は、より動物が過ごしやすいように配慮した展示方法がとられるようになってきている。しかし、それは動物が茂み等に隠れて見えないうりすくを上げてもいて、「人間に見られないこと」自体が彼らの利益であることを語っているようでもある。

興味を持ち、親しみを感じ、愛するためには、ある程度のふれあいが必要になる。だが、そのふれあい自体が自然破壊行為の側面を持つ。難しいものだな、と思いつつ、帰国の途についた。

お勧め度: (★~★★★★★)

メルボルン動物園	★★★★
ヒールズビル・サンクチュアリ	★★★★★
メルボルン水族館 ザ・シー	★★★★
フィリップ島ペンギンパレード	★★★★★
フィリップ島コアラ保護区	★★★